

書 評



戸田貴子編著

シャドーイングで日本語発音レッスン

スリーエーネットワーク、2012 年発行、85p.

ISBN : 978-4-88319-592-3

木下 直子

1. はじめに

本稿は、戸田貴子編著『シャドーイングで日本語発音レッスン』（以下、「本書」とする）に対する書評である。2009 年から 2010 年度に行われた早稲田大学日本語教育研究センターの重点研究プロジェクト（研究代表者：戸田貴子）の成果として発音教材『発音練習のためのシャドーイング』（未公刊）が開発された。本書は、その教材をふまえて新たに書き起こし、初級から中級の日本語学習者を対象とした発音教材として作成されたものである。

本稿では、本書のねらいや構成を概観するとともに、シャドーイングに関する先行研究から本書の意義と課題について述べる。

2. 本書の構成

本書は「伝えたい内容や気持ちが伝わるなめらかな発音を習得すること」をねらいとし、各課は 10 分から 15 分で独習者が練習できるように作られている。以下、本書の構成について全体の構成、各課の構成の順に概観する。

2.1 全体の構成

本書の全体構成は、表 1 の通りである。

表 1「取り扱う音声項目」から本書の特徴が確認できるが、連濁、助数詞、オノマトペ、短縮語など、同じ「日本語発音レッスン」シリーズである『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』の内容以上に、積極的に音声以外の領域との関わりを発音教育に取り入れている。例えば、オノマトペの課では、有声音・無声音の違いによることばの意味、品詞とアクセントの違いについて。無声音「ぺらぺら」「ころころ」などの場合は軽い、快いなどの意味を伴うが、有声音「べらべら」「ごろごろ」などは重い、不快などの意味になると説明している。アクセントも副詞では、頭高型（日本語をぺらぺら話す）、名詞では平板型（日本語がぺらぺらです）になる。このような音声的な視点は日本語母語話者であつ

表1 本書の全体構成

課	タイトル	取り扱う音声項目	独話／ 会話	フォーマル／ インフォーマル
1	はじめまして	挨拶の発音	会話	フォーマル
2	会議	拍	会話	フォーマル
3	お土産	リズム①	会話	フォーマル
4	レストラン予約	リズム②	会話	フォーマル
5	なぞなぞ①	名詞のアクセント	独話	インフォーマル
6	イチロー	人名のアクセント	独話	フォーマル
7	友達同士	文末イントネーション①	会話	インフォーマル
8	欠席	文末イントネーション②	会話	フォーマル
9	手巻きずし	連濁	独話	フォーマル
10	なぞなぞ②	助数詞	独話	フォーマル
11	日本語ぺらぺら	オノマトペ	会話	インフォーマル
12	棚からぼたもち	短縮語	会話	インフォーマル
13	片仮名ことば	外来語	会話	インフォーマル
14	お互いさま	縮約形	会話	インフォーマル
15	住めば都	強調	独話	フォーマル
16	今日の天気	母音の無声化	独話	フォーマル
17	秋葉原の文化	複合語のアクセント	独話	フォーマル
18	奈良の大仏	動詞のアクセント	独話	フォーマル
19	三日坊主	表現意図とイントネーション	会話	フォーマル
20	若さの秘訣	への字型イントネーション	独話	フォーマル

でも気づきにくいものであり、興味深い。

本書の新たな試みとして注目すべき点は、本書を用いて独学する学習者のためのサポートである。本書には、音声資料としてCDのほか、各課に『『発音のポイント』ミニ講座』と称する動画が出版社のホームページ上で公開されている。国内外で発音が学習できる日本語教育機関は限られているという認識があるが、本書のような形であれば、発音を学習したいというより多くの学習者のニーズに応えることができるであろう。

2.2 各課の構成

各課は、(1) 本文 (2) 発音のポイント (3) 練習問題で構成されている。以下、各項目について工夫されている点について整理する。

(1) 本文：本文は、学習者がシャドーイングする内容に当たる。本書のねらいを達成するためには何度も繰り返しシャドーイングを行う必要があり、学習者の興味、関心を引きそうな内容にすることが持続学習を促すカギとなる。本書では、学校、会社、レストラン、ニュースなど、日本で生活しているとよく遭遇する場面が扱われているほか、日本文化、

観光名所、ことわざについても理解が深まる内容となっている。本文の発話形式（独話・対話）や発話スタイル（フォーマル・インフォーマル）にもバリエーションを設けている。

また、音声情報の補助的な情報としてアクセント核を示す表記（ \uparrow ）、イントネーションを表すピッチカーブ（点線）、(2) 発音のポイントで扱う箇所（太字）を用いている（図 1）。

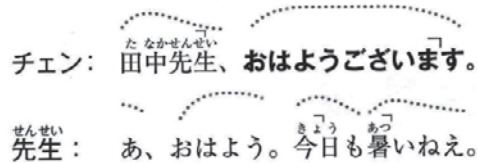


図 1 本文におけるアクセント表記及びピッチカーブ

(2) 発音のポイント：発音のポイントは、表 1 の「取り扱う音声項目」にあたる。発音のポイントは 1 点にしぼられ、具体例が示されている。このポイントの理解度は、聞き取りや間違い探し（例：ビデオカメラ、に \square ほん \square りよ \square うり）のようなテスト「チェック」で確認できる。

(3) 練習問題：練習問題は、(2) 発音のポイントの理解を深めるためのもので、CD を利用して聞き分けたり、発音したりする形式で出題している。

この (1) (2) (3) に加え、発音のポイントの理解度を確認するための「チェック」、音声に関する有用な情報を提供する「ノート」のいずれかが各課に掲載されている。

3. 本書の意義と課題

本書では、発音の練習方法としてシャドーイングを採用しているが、これは発音の学習成功者が共通して取り入れていた学習方法であったことにもとづいている（戸田 2007, 2008）。このシャドーイングはどのような学習方法で、どのような効果が報告されているのか、シャドーイング研究の視点から本書の意義と課題を述べる。

3.1 シャドーイングとは

シャドーイングは、「聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間を置いてそのスピーチと同じ発話を口頭で再生する行為」と定義される（玉井 2005）。

音読は文字情報を読み上げる行為で、発話速度が調整可能で脳内の心的辞書に保持されている情報をもとに発話するのに対し、シャドーイングは聞こえてくる音声情報をコピーするように発話する。シャドーイングでは発話速度の調整は不可能で、脳内の心的辞書に保持されている情報にアクセスする時間的余裕はほとんどない。このように、自ら記憶している音声知識を介さずに聞こえた音声情報を再生するということに、シャドーイングの良さがあると門田（2007）は指摘している。

3.2 シャドーイングの種類

シャドーイングには、リズム、アクセント、イントネーションに注目して行う「プロソ

ディーシャドーイング」と、意味理解に注目して行う「コンテンツシャドーイング」があるが、本書では「プロソディーシャドーイング」の練習方法を採用している。

「コンテンツシャドーイング」については、意味の情報処理と音声の情報処理を同時に行うため、作動記憶容量 (Working memory ; Baddeley 1986) との関係が報告されている (徐・松見 2014)。それは、作動記憶容量の大きさが文章内容の記憶や発音の正確性、流暢性に影響を与えるというものであり、発音に焦点をあてた学習には「プロソディーシャドーイング」の方が向いている (大久保ほか 2013)。

本書では、プロソディーシャドーイングの具体的な練習方法として (1) 一般的なシャドーイング、(2) マンブリング、(3) サイレント・シャドーイングを取り上げて日本語、英語、中国語、韓国語で紹介し、(1) から (3) の練習方法を場面や状況で使い分けるよう指示している。

3.3 シャドーイングの効果

シャドーイングの効果については、英語教育の場合、リズムやストレス、イントネーションに効果があるという報告 (Acton 1984, 染谷 1996, 鳥飼 1997)、発話速度に効果があるという報告 (Miyake 2009) などがある。

日本語教育の分野での報告においては、アクセントには効果があったが、リズムや単音にはアクセントほどの効果が見られないとする報告 (高橋 2006)、文の切れ目の発音やアクセントに効果があったという報告 (唐澤 2010)、アクセント、疑問文の文末上昇イントネーション、発話速度に効果があるという報告 (阿栄娜・林 2011, 2012) などがある。

このように、効果は報告により異なるが、発話速度への効果については共通して確認されている。本書では「なめらかな発音」をねらいとしており、シャドーイングによる効果は期待できるだろう。

シャドーイングには一方で課題もある。そのひとつに「聞き取り能力」の影響がある。高橋・松崎 (2007) は聞き取り能力がシャドーイングに影響すると報告しているが、そもそも学習者がシャドーイングで聞き取れないところは、気づきやインテイクが生じにくく、長期記憶に結びつきにくい。先のシャドーイング効果の報告にばらつきがあったのは聞き取れていなかったためなのか、他の原因か、そのメカニズムは明らかになっていない。

このほか、音声による情報処理の好みも結果に影響することも考えられる。音声による情報処理を好む「聴覚型」の学習スタイルを持つ学習者は、リズムやアクセントの習得度が高い (中川ほか 2008, 木下 2011)。シャドーイングのような音声情報を主とした学習方法の効果にはこのような学習スタイルとの関連も予測される。

シャドーイングに関する効果検証については、学習成功者に共通して用いられているほか、経験的にも役立つことが実感できる一方で、研究成果が十分に得られているとは言い難く、今後の研究成果の報告を待ちたい。

4. おわりに

本稿では、『シャドーイングで日本語発音レッスン』のねらいや構成を概観し、シャドー

イングに関する先行研究にふれながら、本書の意義と課題について述べた。

筆者は、発音クラスを担当しており、自分に合った持続可能な学習方法を探すことを 1 つのクラスの到達目標としているが、自分に合っていた発音の学習方法について学期末に学習者に調査した結果から、シャドーイングは音声分析ソフト Praat を使った学習方法と並んで自分に合っていると評価する学習者が多い (Kinoshita 2015)。

なめらかな発音を学習目標とする多くの日本語学習者がシャドーイングを試し、楽しみながら発音学習が継続できる書である。

参考文献

- 阿栄娜・林良子 (2011) 「シャドーイング訓練による日本語学習者における語アクセントの変化」『ことばの科学研究』12, pp. 57-71
- 阿栄娜・林良子 (2012) 「縦断的シャドーイング訓練による発音の変化—異なる習熟度の日本語学習者を対象に—」『国際文化学』25, pp. 17-27
- 大久保雅子・神山由紀子・小西玲子・福井貴代美 (2013) 「アクセント習得を促すシャドーイング実践—効果的な実践方法を目指して—」『早稲田日本語教育実践研究』1, pp. 37-47
- 門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 唐澤麻里 (2010) 「シャドーイングが日本語学習者にもたらす影響—短期練習による発音面および学習者意識の観点から—」『お茶の水女子大学人文科学研究』6, pp. 209-220
- 木下直子 (2011) 『日本語のリズム習得と教育』早稲田大学出版部
- 徐芳芳・松見法男 (2014) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のシャドーイング遂行成績に影響を与える要因—ワーキングメモリ容量と試行数の観点から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第 63 号, pp. 253-260
- 染谷泰正 (1996) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」『通訳理論研究 11』6 (2), pp. 27-44
- 高橋恵利子 (2006) 「シャドーイングが発音に与える影響」『2006 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 57-62
- 高橋恵利子・松崎寛 (2007) 「プロソディシャドーイングが日本語学習者の発音に与える影響」『広島大学日本語教育研究』17, pp. 73-80
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房
- 戸田貴子 (2007) 「シャドーイングコース開設に向けての基礎研究」『日本語教育方法研究会誌』14 (1), pp. 8-9
- 戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版
- 鳥飼久美子 (1997) 「英語教育の一環としての通訳訓練」『言語』26 (9), pp. 60-66
- 中川千恵子・クリスシェパード・木下直子 (2008) 「発音学習における学習成功者と学習遅滞者の学習スタイルと学習ストラテジーの違い」『2008 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 146-151
- Acton, W. (1984) Changing fossilized pronunciation, *TESOL Quarterly*, 18, pp. 71-85
- Baddeley, A. D. (1986) *Working Memory*, Oxford Press.
- Kinoshita, N. (2015) Learner preferences and the learning of Japanese rhythm, *Proceedings of the 6th Pronunciation in Second Language Learning and Teaching Conference*, pp. 51-62
- Miyake, S. (2009) Cognitive processes in phrase shadowing: focusing on articulation rate and shadowing latency, *JACET Journal*, 48, pp. 15-28

(きのした なおこ 早稲田大学日本語教育研究センター)